

札幌保健医療大学

2026年度 一般選抜入学試験後期日程

国 語

2026年3月12日(木)

1時限目 9:30~10:30

注 意

1. この問題冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけません。
2. 解答時間は60分です。
3. 解答用紙の受験番号欄に受験番号を記入してください。
4. 問題冊子は1頁～15頁、解答用紙は1枚です。
5. 解答はすべて解答用紙に記入してください。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(尚、問題作成上、本文の一部が変更されている)

科学の軍事化・技術化・商業化のいずれもが、人間の欲望に<sup>こた</sup>応えるように科学が変容してきたためと言える。とすると、人間に欲望があるが故に、科学は発展してきたと言えないでもない。実際、好奇心に駆動されてどんどん想像力を膨らませ、未知の物質が秘めている力をもっと知りたい、そこに何かを付け足すこと<sup>よ</sup>によって思いがけない機能が発現するのではないか、というような人間が本来持つ探究心によって科学や技術の先端部が切り拓かれてきたのは事実である。これも欲望と言って差し支えないだろう。(1)そもそも人類は生き残りたいという欲望があればこそ、厳しい自然環境を乗り越えて持続してきたことは疑いない。神のケイジ<sup>a</sup>を読み取りたいという自然哲学者の欲望があり、自然を理解したいという現代の科学者の欲望も同じ範疇<sup>はんちゆう</sup>に入る。精神的欲望そのものは、人間を人間たらしめている要素<sup>2</sup>なのである。A、二〇世紀に入って欲望に関わる様相が変わってきた。欲望がもつばら物質的なものと結びつき、戦争に勝利する、金儲けにつながる、便利さを向上させる、というような直接の効能や利得を求めるようになったからだ。そして、科学もそれに歩調を合わせ、精神的な欲望を置き去りにして、物質的な欲望を満たすことに奔走するのがその目的であるかのように変質したのである。

かつては「必要は発明の母」であった。(2)技術は物質的な欲望から出発したのは事実だが、「必要」という精神の飢えが「発明」という物質的生産へと導いたことを忘れてはならない。精神が物質をコントロールしていたのだ。しかし、現代は「発明は必要の母」となった。「発明」品を改良して新たな機能を付加することにより、人々に「必要」であったと錯覚させ、消費を加速したのである。必要と発明の関係が逆転し、物質が精神を先導するようになったと言える。物質こそが資本の根源であるからだ。でも、それでは真のイノベーション<sup>4</sup>はあり得えない。(3)精神的な欲望は時間を区切らないが、物質的欲望は短期の目標で進む。現代科学を底の浅いもの<sup>5</sup>にしているのは、物質的欲望を第一義としてきたためだろう。現代科学は物質的欲望に翻弄<sup>ほんろう</sup>されていると言えるかもしれない。(4)

その端的な例は、<sup>6</sup>浪費を美德とする社会的風潮であろう。大量生産・大量消費・大量ハイキ<sup>b</sup>こそが現代社会を構築している基本構造であり、買い換え使い捨てがショウウレイ<sup>c</sup>されている。そして、科学や技術をそれに動員することこそが至上命令になっている。「役に立つ」ことがなければ意味がなく、「欲望を刺激する」要素がなければ開発が認められず研究費も出ないのだ。大学における経済論理のコンテンツ<sup>d</sup>や実用化への圧力は、その方向への誘導であり、科学者も本意であれそれに従っていかざるを得ない。(5)

浪費社会に対して、「清貧の社会」という対極的な社会の構想がある。物質的な欲望を拒否し、精神的な欲望を充足させることを第一義とする社会である。物質における満足を求めるのではなく、精神の自由な飛翔<sup>ひじよう</sup>を得ることこそを至上とする社会とも言える。私はそのよう

な社会を希求しているのだが、それは不可能なのだろうか。そして、そのような科学は発展の芽を摘まれるのであろうか。

**B**、科学は物質的基盤がなければ進歩しない。実験の技術開発があればこそ仮説が実証され、それを基礎にして新たな知見が得られていくからだ。あるいは、実験によって思いがけない新現象が発見され、それによって科学の世界が大きく広がったこともある。しかしながら、あくまで科学を推進しているのは好奇心や想像力、つまり創造への意欲であり、精神的欲望がその出発点なのである。それが萎えてしまえば科学は立ち枯れてしまい、技術的改良のみの詰まらない内容になってしまうだろう。経済論理が強調され、実用主義が罷り通る現代は、その入り口に差し掛かっているのではないだろうか。物質的欲望に囚われない清貧な社会でこそ、真の科学は花開くと言うべきなのである。(6)

物質的欲望がどんどん勝っていくとどうなるか。一つは、「欲望は欲望を呼び」、満足する、自足するという感覚を失っていくことだ。そして、より欲望を膨らませようとするから、自分が制御できなくなる。その状況は麻薬に似ている。現代の成長至上主義は市場の麻薬であり、戦争を必然化する。資源がコカツすると奪うしかなくなってしまうからだ。それを恐れて軍事を増強し、核兵器で武装する。結局は、人々の生活に役立たない兵器ばかりが蓄積されていくことになる。役に立とうという物質的欲望は空回りし、かえって役に立たない浪費を積み重ねていくばかりとなってしまうのだ。戦争ばかりではない、技術を通じての欲望の達成も同じ状況が引き起こされている。私たちは、世の中に流通しているものに目を惹かれるが、流通せずに闇から闇へとハイキされていったものはゴマンとあるだろう。物質に固執すれば、有限の可能性のなかで盛衰が生じざるを得ないのである。精神的欲望は無限であり、いずれも生き残る可能性を秘めていることと決定的な差があることを忘れないでいたいものだ。

(池内了「科学と人間の不協和音」による)

問一 傍線部 a、e のカタカナ部を漢字にしたとき、次の①～⑤の傍線部と同じ漢字を用いるものを、それぞれ一つ選び記号で答えなさい。

a ケイジ

- ① 現代は新しい技術のオンケイを受けている。
- ② アパートを借りるケイヤクを結んだ。
- ③ 彼は物事を大げさに言うケイコウがある。
- ④ 彼の著書に大いにケイハツされた。
- ⑤ 子どもが寺のケイダイで遊んでいた。

b ハイキ

- ① 海軍のキカンは最新の技術を搭載している。
- ② 彼は今日、とてもキゲンが悪かった。
- ③ 彼の趣味はタキにわたっている。
- ④ 裁判所は原告の請求をキキヤクした。
- ⑤ 彼はオーケストラのシキを任された。

c ショウレイ

- ① 今年の夏はレイネンに比べて暑かった。
- ② 彼はいつもレイギ正しい言葉遣いを心がけている。
- ③ 申請書に不備があったため、書類がヘンレイされてきた。
- ④ 軍隊では上位の者が下位の者にゴウレイをかける。
- ⑤ 多くのゲキレイの手紙が私の心を慰めてくれた。

d カンテツ

- ① 道理に通じており、見識の優れた人物をテツジンと言う。
- ② 事件の詳細をテツテイ的に調査した。
- ③ この看板は条例違反のためテツキヨした。
- ④ 事件への関与が原因で大臣はコウテツされる見通しだ。
- ⑤ 川底や海底にはサテツが混じっている。

e コカツ

- ① この件はわれわれのカンカツ外です。
- ② 彼の登場に観客は拍手カツサイした。
- ③ 飛行機が空港のカツソウ路に降りた。
- ④ 複数のファイルをイツカツして処理した。
- ⑤ 私たちは世界平和をカツボウしている。

問二 空欄 A、B に入る最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 第一に
- ② 確かに
- ③ 結果的に
- ④ 次に
- ⑤ なぜなら
- ⑥ ただし
- ⑦ しかし
- ⑧ 不思議と

問三 傍線部1「範疇」の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① カウント
- ② チーム
- ③ カテゴリー
- ④ ワーク
- ⑤ パーティー
- ⑥ クラブ

問四 傍線部2「人間を人間たらしめている要素なのである。」とあるが、「人間を人間たらしめている」とはどういうことか、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 人間を限界まで高めている。
- ② 人間を生命体として存続させている。
- ③ 人間と自然との違いを際立たせている。
- ④ 人間を人間として成り立たせている。
- ⑤ 人間を人間らしく振る舞うように仕向けている。

問五 傍線部3「必要と発明の関係が逆転し」とあるが、必要と発明の関係が逆転した結果、どうなったか、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 「発明」によって生み出されたものが人間の欲望を刺激し、それが「必要」であったと思わせるまでになった。
- ② 「必要」なものがすべて発明されると、人間は必要でないものをも「発明」せずにはいられなくなった。
- ③ 「発明」によって物質的な欲望がすっかり満たされると、人間は何かを「必要」だと感じるものがなくなった。
- ④ 「必要」に関わる様相が変化し、「発明」されたものがすぐには「必要」なものとはならなくなった。
- ⑤ 物質が精神によってコントロールされ、資本の根源となったので、「必要」と思われるものが次々と「発明」されるようになった。

問六 傍線部4「イノベーション」の本文中の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 持続
- ② 豹変
- ③ 革新
- ④ 続伸
- ⑤ 成長
- ⑥ 統合
- ⑦ 協力

問七 傍線部5 「現代科学を底の浅いものになっているのは、物質的欲望を第一義としてきたためだろう。」とあるが、「底の浅い」科学とはどういうものか、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 物質的欲望を求めず、精神的欲望を満たすのみの科学。
- ② 精神の自由な飛翔を得ることのみを目標とする科学。
- ③ 目標に対して時間を区切らず、時間ばかり消費して進める科学。
- ④ 物質における満足ばかり追い求める科学。
- ⑤ 心を豊かにすることではしか未来を切り開くことのできない科学。

問八 傍線部6 「浪費を美德とする社会的風潮であろう。」とあるが、「浪費を美德とする社会」とはどういうものか、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 物質的欲望にとられない清貧な社会
- ② 経済重視の利己主義が広まる社会
- ③ 高い倫理観に基づき他人に奉仕する社会
- ④ 浪費の本来的意義を正しく理解している社会
- ⑤ 消費欲求が推し進める成長至上主義の社会

問九 傍線部7 「科学は立ち枯れてしまい、技術的改良のみの詰まらない内容になってしまっただろう。」とあるが、なぜ科学は立ち枯れてしまうのか、その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 精神的欲求に基づかない科学は、社会が求めるものを生み出さないから。
- ② 物質ばかり重視されると、好奇心や想像力が軽視されるようになるから。
- ③ 物質的基盤がないところでは技術開発が困難で、科学の進歩が滞るから。
- ④ 経済的理論が強調されている現代では、実用的な科学は理想と異なるものとなっているから。
- ⑤ 精神的な欲求を追い求めることにより、科学技術の開発は机上の空論となり新たな知見を得られなくなっているから。

問十 傍線部8「技術を通じての欲望の達成も同じ状況が引き起こされている。」とあるが、どのようなことを言っているのか、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 物質的欲望にとられ成長至上主義のもとに資源を奪い合うことになるので、戦争が起こる可能性に備えて、核兵器のように人間の生活を破壊するような技術が生み出されてしまうということ。
- ② 物質に固執することで欲望がどんどん膨らんでいくが、欲望の技術による達成は限界があるため、物質的欲望だけが空回りして人間に役立つものを何も流通させることができないということ。
- ③ 精神的欲望は無限であり、世の中に限りなく物質を生み出すが、欲望がどんどん増大していき、常に大量生産しなければならぬ状況になるということ。
- ④ 物質的欲望が制御できなくなるとそれを達成するための資源が大量に必要なようになるが、地球上の資源は限りがあるので、技術の発達にも限界が生じ人間の生活に支障をきたしてしまうということ。
- ⑤ 効能や利得を求める社会では、物質的欲望を抑えることができず、さまざまなものが生み出されていくが、その中には人間にとって不必要で役立たないものがあるということ。

問十一 次の文章は本文の(1)～(6)のどこに入れるのが最も適当か、記号で答えなさい。  
物質的欲望が科学を駆動していると言えよう。

問十二 本文に表題をつける場合、最も適当なものはどれか、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 「必要」が先か「発明」が先か
- ② 「発明」が文化を進化させる
- ③ 「必要」と「発明」は表裏一体
- ④ 「発明」という錯覚
- ⑤ 「必要」の原理

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(尚、問題作成上、本文の一部が変更されている)

カーテンをあけると一面の雪景色だ。まだふりしきっている粉雪を寝起きの目で夢のつづきのようにぼんやり見ていると、急に何か思いついたように邦子の顔はかがやきだした。そうだ、雪の朝、それも可成かなりの降りに、白鳥を乗りまわしたいというのが宿望Aだったのだ。N乗馬倶楽部では純白の馬は「白鳥」一頭きりだった。早くかけつけないと、グウゼン邦子とおなじ考えの会員がいて、先取りされてしまう惧れがある。朝おきるときは今日は何をしでかすかわからないという不安を感じるほどの健康さで、今日に限らずベッドから下りるとき文字どおり「床を蹴けって」起きるならわしなのだが、今朝はとりわけそうだった。顔を洗うまえから外出着に着かえてしまった。白いウールの乗馬服、白い乗馬袴キユロツト、長靴だけは白というわけに行かなかったが、手袋まで白キツド※1の本当は乗馬用ではない優雅な指のながいのはめてみた。寝起きの体がほてっているせいか手袋の留金が手首に快い冷たさだ。鏡の前に立つと白づくめのなかから、はやくも馬を駆っているかのような上気2した頬ほおが薔薇ばらいろを際立たせている。

3 こうして一時間あまりつづいた夢心地が倶楽部の休憩室へ入ったとたんに崩れてしまった。その入口の黒板に、

「白鳥」—— 高原たかはら

と、ぶつきらばうな白墨の字があつて、会員なのだが一度も口をきいたことのないむつつり屋の青年が、(それが高原ということも邦子は今はじめて知ったのだが、白い乗馬服の、むつつり屋らしいガンジbョウな背を向けて、ストーヴにあたりながら、鞭むちでかるくストーヴの胸を叩たたいていた。邦子はその背中から云いいしれない意地悪さを自分勝手に感じとつて、後をも見ずに休憩室を出て行こうとした。急激な廻まわれ右に鳴った拍車※2の音がいかにも感情的だったのでそれでやつと気づいたららしく高原はふりかえり、

「あ、堀田ほったさん」

柄えに似合わぬエイピンな声でよびかけた。名前4を知られていようとは思わなかったので気をのまれて振向いた邦子の、白づくめの服装を無遠慮にじつと見握みすええると、青年は、「ははあん」と謂いった大人びた納得の微笑をうかべて、黒板の方へ歩き出しながら、

「僕、白鳥でなくてもいいんですよ。お譲りしましょう」

—— 邦子は思わず「ああよかった」と言いたげな御先走りの微笑を見せてしまって、気がついて赤くなった。さっきの高原の大人びた微笑には生意気なところがなかった、と急に好意的な批評も心にかんで来て、それでも一応、

「あら、そんな……、あたくし後からまいりましたのに」

——青年にしても、こんなに早く来て黒板にでかど書いておいたのは、今朝起きがけに邦子が危惧したとおり、グウゼン同じ宿望を抱いていたからにちがいないのだ。

しかし高原はむつり屋らしい背をみせたまま、黙って黒板消しで「白鳥」を消して、他の馬に書きかえようとしている。その好意から邦子自身がまるで除外されているようなそっけなさなので、何か胸の軽くなるおかしさで窓のほうをながめやると、馬場いちめんにふりしきる粉雪のなかに、かこいの柵の青ペンキばかりがあざやかだ。

引出されたときは雪におびえて、白鳥は鼻孔を怒らして、雪よりも白い息をはつはと吐いていたが、乗りまわすうちに次第にいつもの流れるような快い歩度になった。手綱をにぎっている優雅な白手袋から自分の白ずくめの全身像を空想してみようとしても、丁度まつ毛に雪片がくつついて見えなくしているように、何かがその空想の邪魔をしているのが感じられる。若い女というものは誰かに見られていると知つてからキュウクツになるのではない。ふいに体が固くなるので、誰かに見詰められていることがわかるのだが。

同じひろさの馬場が二つつながって、その通路を中心に双方の馬場に亙って8字形の運動も出来る仕組になっているのに、高原はけつして邦子の方の馬場へ入って来なかった。雪を透かして彼の栗毛の馬は妙に艶めかしい美しさだ。習いたてらしいピアフエを練習している一瞬の跳躍の姿勢が銅像の馬のような筋肉の躍動にあふれている。その馬の上から時々ちらとこちらを見る目が、雪のなかでもえている一点の火のようだった。

どうしてもこちらの馬場へ入って来ない高原を感じると、邦子は一人でぐるぐるまわっている馬場のひろさが、かえって高原の投げた輪のなかをどうどうめぐりしているようなふしぎな狭さに感じられて、時には彼の厚い掌の上を駆けめぐっているにすぎないのではないかと、妙な空想がわくのさえもどかしい。それを又、高原の馬をゆずられた負け目だと感じることも彼女の朝の朗らかさを台無しにした。

三十分ほど乗りまわして邦子は急に思いついて、二つの馬場の堺で馬を下りた。雪の上へとび下りると長靴の中で冷え切った足が釘をふみぬいたような痛みをつき上げた。その痛みにしかめた顔を上げたところに何事かと寄ってきた馬上のあの烈しい視線があったので、彼女はふしぎな口惜しさで顔をますます硬ばらせた。

「あたくし、もう帰りますから『白鳥』にお乗りになりませんか？その馬はあたくしが厩舎へ引いてまいりますわ」と切口上で言った。

「僕はそんなに『白鳥』に乗りたいわけじゃありません」

「でも……」と邦子は高原の感情を手繰り切れない腹立たしさから怒った顔つきになりかける自分が何か痛快な気もして、

「この馬まだ疲れていないのですもの。引いてかえれば他の人が乗るでしょうけれど、よろしいの？」

「どうしても僕が乗らないと、その馬、承知しませんか？」

「あら、しよっていらつしやるわ」

見る間に高原は荒っぽい下り方をして雪を踏み散らして邦子の前に立った。そして吐息をしてスキー帽を左手でずらし上げると、額際から湯気が立っている。雪の音がきこえるようなチンモクのなかで顔を見合わしていると、高原ははじめて額から流れる汗に気づいたようにハンカチをつかみ出して、あらぬ方へ目をそらしたまま、

「じゃ、馬を交代しましょう。今度は同じ馬場で御一緒に乗りまわせんか」

——ふと高原の馬もこの白キッドの手袋の上をさつきからどうどうめぐりしていたのだと邦子は今気がついて、やさしく手綱を高原の手にかかせながら、自分の手から何か大事なものを彼にあずけてしまったような甘い虚しさを感じた。

白鳥は高原に首すじを撫でられて、ふりかかる雪を神経質に耳をびくびくさせながら、はっはと吐く息は雲のように、その白い背からは大きな白い翼がみるみる生えそうな姿だった。

ストーヴがさかんにおこってむっとするほどの休憩室では、雪をめあてにきた物好きな会員が二三人高話＊たかばなしをしていたが、戸口で笑いあつて快活に雪を落して入って来る高原と邦子を見ると、上手の物好きに呆れた顔をした。邦子はそのなかに女の友達を一人見つけて、脱いだ手袋をはたきながら走り寄ると、

「頭がまっ白よ」

とのつげに言われた。馬がたてがみをゆすぶるように、急に仰＊あたまのいて頭を振ったので、雪はそこにいた人の膝ひざや、ストーヴの上に花火のようにふりかかった。友達をあわてて膝をどけて、

「乱暴ねえ。あなた白鳥に乗っていらしたの？」

「ええ」と邦子はふりむいて微笑ほほえみかけて、

「高原さん、二人でずいぶん白鳥を乗りまわしたわね」

「きょうは白鳥を満喫まんきつしましたね」

——居合わせた会員はこのお転婆<sup>B</sup>なお嬢さんは青年と一つ馬に相乗りをしていたのかしらと怪訝<sup>けげん</sup>な顔をした。いつの間にか高原と邦子には白い馬が二頭いたような気がするのだった。二人とも栗毛の馬の存在はすっかり忘れていたのだった。<sup>9</sup>  
恋人同志というものはいつでも栗毛の馬の存在を忘れてしまうものなのである。

(三島由紀夫「女神」による)

- ※1 子ヤギの革、「キッドスキン」とも呼ばれ、高級な革製品として使用される。
- ※2 乗馬靴の踵<sup>かかと</sup>につける金具。
- ※3 馬術の歩法の一つ。速歩の一種で足踏みのような動作をする。
- ※4 堅苦しい言い方。
- ※5 「しよっている」はうぬぼれているという意味。
- ※6 声高に話すこと。
- ※7 最初に

問一 傍線部 a、e のカタカナ部を漢字にしたとき、次の①～⑤の傍線部と同じ漢字を用いるものをそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

a グウゼン

- ① 縄文時代の遺跡から多数のドグウが出土した。
- ② 浦島太郎はリュウグウ城で乙姫様に出会いもてなされた。
- ③ イソップのグウワは多くの教訓を含んでいる。
- ④ 旅行中、美しい景色にソウグウした。
- ⑤ 部屋のイチグウに古い本が積まれている。

b ガンジョウ

- ① このガングは子どもの創造性を育むのに役立っている。
- ② 彼はガンコでなかなか自分の意見を変えない。
- ③ この絵は本物そっくりに作られたガンサクだ。
- ④ 彼は結婚ガンボウはあまりない。
- ⑤ 彼のガンメンは傷だらけだった。

c エイビン

- ① 彼は源氏のマツエイだという噂がある。
- ② ここにはエイガを極めた貴族の館があつた。
- ③ 少数セイエイのスタッフが効率的に仕事を進めている。
- ④ 故障した船をタグボートがエイコウした。
- ⑤ この海岸はユウエイ禁止になっている。

d キュウクツ

- ① 彼は不正を働いた人物をキュウダンした。
- ② 犬のキュウカクは人間よりはるかに優れている。
- ③ この掃除機はとてもキュウイン力が強い。
- ④ この映画は誰からも愛されるフキュウの名作だ。
- ⑤ 彼は経済的にコンキュウしている。

e チンモク

- ① 祭りの日には多くのチヨウチンが飾られる。
- ② 彼は業界のジュウチンとして多くの人に尊敬されている。
- ③ このアパートはチンタイ物件だ。
- ④ 飛行機が敵艦をゲキチンした。
- ⑤ チンピンを求めて骨董市を訪れた。

問二 傍線部A「宿望」、B「お転婆な」の本文中の意味として、最も適当なものをそれぞれ①～⑤の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A ① どこかに行きたいという望み ② 身の丈に合わない望み ③ 前から抱いている望み  
④ 仲良くなりたいたいという望み ⑤ 十分に楽しみたいという望み
- B ① 美しい ② 下品な ③ 無知な ④ 活発な ⑤ ひょうきんな

問三 傍線部1「今朝はとりわけそうだった。」とあるが、なぜか、その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 朝少しでも早く起きて、時間を有効に使いたかったから。  
② 雪の降りしきる朝、白馬である「白鳥」に乗るとい夢が叶いそうだったから。  
③ 朝起きた時、何をしでかすかわからないほど健康で気分がよかったから。  
④ 朝起きた時、楽しみのあまり顔を洗うのもわすれるほど慌てていたから。  
⑤ 朝、床を蹴ることで家族に自分が目覚めたことを知らせたかったから。

問四 傍線部2「上気した頬が蔷薇いろを際立たせている。」とあるが、「上気した頬」とはどのような状態のことか、その説明として最も

適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ① いろいろ空想している状態。  
② 軽く運動して体が温まっている状態。  
③ 他に気を取られている状態。  
④ 興奮して顔がほてっている状態。  
⑤ 好意を強く抱いている状態。

問五 傍線部3「こうして一時間あまりつづいた夢心地が倶楽部の休憩室へ入ったとたんに崩れてしまった。」とあるが、その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 「白鳥」に先約があったから。
- ② 苦手な青年が部屋にいたから。
- ③ 今まで考えていたことが誤りであったと気づいたから。
- ④ 一時間はあまりに長すぎる時間だったから。
- ⑤ 入り口の黒板の文字がぶつきらぼうであったから。

問六 傍線部4「名前を知られていようとは思わなかったので気をのまれて振向いた」とあるが、なぜ「気をのまれ」たのか、その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① むつつりした青年だと思っていた高原が、快活な声で呼びかけたので、その態度に圧倒されたから。
- ② 乱暴な行動の青年だと思っていた高原が、丁寧に話しかけてきたので、気が抜けてしまったから。
- ③ 控えめな青年だと思っていた高原が、はっきりした声で自分の名前を呼んだので、その印象が新鮮であったから。
- ④ ぶつきらぼうな青年だと思っていた高原が、記憶力がよく利発で驚いてしまったから。
- ⑤ 愛想のない青年だと思っていた高原が、邦子の名前を覚えていたので、あっけにとられたから。

問七 傍線部5「「ははあん」と謂った大人びた納得の微笑」について、青年のこの時の思いはどのようなものであったか、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 君は私より早くここに来たかったですね。
- ② 君は雪を意識しているんですね。
- ③ 君は白馬に乗りたいたいですね。
- ④ 君は自分の服装が目立っているかと思っていますね。
- ⑤ 君は私が先に白墨で文字を書いたことが気に入らないのですね。

問八 傍線部6「その好意から邦子自身がまるで除外されているようなそっけなさ」とは高原のどのような態度を表しているか、その説明と

して、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 高原は邦子の気持ちを見無視するような失礼な態度をとったこと。
- ② 高原は邦子が不愉快に思うほど、むつつりとした態度であったこと。
- ③ 高原は内心不本意に思いながら、黒板の文字を消したということ。
- ④ 高原の好意は押し付けがましくないものであったこと。
- ⑤ 高原は本心を隠して知らんぷりをしていたということ。

問九 傍線部7「何かがその空想の邪魔をしているのが感じられる。」とあるが、「何か」とは何を指すか、その説明として最も適当なもの

を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 雪におびえて鼻孔を怒らして白い息をはつはと吐いている白鳥。
- ② 見たことがないほどの絶景で、あたり一面真っ白になっていく雪景色。
- ③ 手綱を握っている自分をその場にふさわしくないと非難している人々の声。
- ④ ピアッフエを練習して躍動感あふれる動きをしている栗毛の馬の姿。
- ⑤ 時々、栗毛の馬の馬上から投げかけられた高原の熱い視線。

問十 傍線部8「彼の厚い掌の上をかけめぐっているにすぎない」とあるが、これは邦子のどのような状態を表しているのか、その説明と

して最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 高原から馬を譲られた負け目があるので、申し訳ないという気持ちでいる状態。
- ② 高原が近くで馬を乗り回しているからかわれているような気持ちでいる状態。
- ③ 高原のことを意識して乗馬に熱中できないでいる状態。
- ④ 高原の乗馬の技量の素晴らしさに見とれている状態。
- ⑤ 馬場の形が8字形なので、掌の上を走っているように行ったり来たりしている状態。

問十一 傍線部9「二人とも栗毛の馬の存在はすっかり忘れていたのだ。」とあるが、なぜか、その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 突然の恋物語の誕生のためには、非日常的な白馬の存在こそがふさわしく、ありふれた栗毛色の馬では用をなさないから。
- ② 栗毛色の馬はどこにでもいる種類で、白馬である「白鳥」に比べて地味で目立たない存在だったから。
- ③ 邦子も高原も初めから白馬の「白鳥」に乗ることを目的にしており、二番手の栗毛色の馬では意味がなかったから。
- ④ 栗毛色の馬はすでにその場を離れ、厩舎の中に入ってしまったので、その姿を見ることができなくなったから。
- ⑤ 栗毛色の馬は馬場をいつまでも走りつづけ遠くに行ってしまったので、二人の視界からはずれてしまっているから。

問十二 次の①～⑤の文学作品のうち、三島由紀夫の代表作として適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 雪国
- ② 潮騒
- ③ 放浪記
- ④ 人間失格
- ⑤ 地獄変